

2009年8月2日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：サムエル記第一 6章 13～21節

説教題：だれが聖なる神の前に立ちえよう

2018年1月28日 礼拝メッセージ

聖書：第一列王記 6章 14～38節

説教：キリストのからだ

はじめに

引き続き第一列王記を見て参ります。ソロモンがイスラエルの三代目の王になったとき、イスラエルを治めるのです。経験がなく不安に駆られました。そのことを主に祈ったとき、主は喜んで民を治めるための知恵をソロモンに与えると約束します。その知恵がどれほどすばらしいものであったのか、そのことは彼がこれから建てていく神殿のことから明らかになっていきます。

そもそもなぜソロモンは神殿を建てることを思いついたのか。実は、主があるとき、ダビデに語っていたのを彼は覚えていたのです。「あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとにの起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」(第二サムエル記 7章 12, 13節)

「あなたの身から出る世継ぎの子」とは、自然に考えればソロモンを指します。でも本当にそうなのか。世の王さまであれば、これはもう自分のことだと決め、立派な神殿を建てて自分を誇るチャンスに利用するでしょう。しかしソロモンは主から知恵をいただいています。そこは慎重でした。とにかく主の御

心を求めて祈りました。そんなとき、イスラエルの北隣にあるツロの王ヒラムと親しくなる機会があり、神殿を建てるというのなら必要なだけ木材を送り、職人を出すと行って援助を申し出てがありました。これを聞いてソロモンは、初めて自分が神殿を建てる役割を任せられていると確信し、プロジェクトを開始します。

きょうのところは、神殿の内側の様子について細かな説明が続きます。ここにどんな恵みがあるのかと思うかもしれませんが、いつも言いますが、聖書は人を救うために書かれたものです。ここにも必ず救いの恵みがあるはず。それはなんであるのか。ご一緒に見て参ります。

1 神殿の内部

今日も週報に、神殿の内側の様子がわかるような絵を載せております。一枚目の絵は、神殿の内側を横から見たものです。右側に入り口がありそこから中に入ると本堂になり、奥に進むと階段があつてその先に至聖所と呼ばれる部屋があります。その至聖所の様子を詳しく書いたのがもう一枚の絵です。ケルビムと呼ばれる翼を持った不思議なかたちをした像が置かれています。人間の顔をした鳥のようでありながら、足はライオンのもでもあります。想像で書いた部分があるため、実際にこのような形であったのかはわかりません。しかし翼を広げて至聖所全体を覆っていることは聖書に書かれているとお

りです。二つのケルビムの間には、モーセがシナイ山でいただいてきた二枚の契約の板が入っている箱が置かれています。このあたりのことは 8 章で触れることになると思います。

こうして見ると、神殿の内部は思いのほか単純です。入り口があって聖所と呼ばれる内堂があり、その奥に至聖所がある。この構造は、モーセの時代に主が教えてくださった幕屋の形そのままです。ただ大きく違うところが二点あります。幕屋は文字どおり糸で織った幕でできていましたが、神殿は石と木材で造られていますから材料が違います。それが一つ。そして二つ目は、内側の壁と床についてです。幕屋のときは内側についてはなにも指示がありませんでした。そのまま幕の生地が表面に見えています。ところが、神殿は絵で見てわかるとおり、床も壁もあらゆるところに金箔をかぶせています。これが大きな違いです。

豊臣秀吉は、時の天皇家の人々を招くためにわざわざ金の茶室を造ったと言われます。貧しい農家の出身の秀吉と、雲上人と呼ばれていた人たちです。身分の違いはどうすることもできない。それで一生懸命背伸びをするために金の茶室を作ったのかも知れません。ソロモンはどうだったのか。自分の権力を誇ろうとしてこうしたのか。そんなはずはありません。自分が神殿を建ててよいのか、主の御心を確かめようと慎重に事を進めた人ですから、金箔を全面に貼るということも必ず意味があっただけで、いっただいどんな意味があったのか。

2 繰り返されることば

1) 「建てる」 + 「礎を据えた」：7回

それで、いろいろな本を調べてみました。ところがどの本を見ても見事なくらいにも説明が書いていない。自分で考えなさいということです。必ずどこかにヒントがあるはずです。そうすると、なんども繰り返されていることばが出て来ることに気がついた。私が見た限り、少なくとも三つのことばが繰り返されている。もちろんただ繰り返されているだけなら意味がありません。原文で読むとわかることですが、七回とか十二回とか聖書でも特別に扱われる数字の回数だけ繰り返されている。そこに何かあるのではと考えるのは自然でしょう。

どんなことばが繰り返されているのか。一つ目は、新改訳聖書ではいろいろなことばに訳していてわかりにくいのですが、「(神殿を) 建てる」が六回。そして 37 節の「神殿の礎を据えた」を合わせると計七回あります。「建てる」と「礎を据える」は別だという意見もあるでしょう。あるいは単なる偶然にすぎないという批判もあり得ます。

2) 「張る」「かぶせる」：12回

しかし次はどうでしょうか。「(金を) かぶせる」ということば、これは十二回繰り返されています。これも偶然だという批判はあるかもしれません。

3) 「至聖所」「内堂」：7回

繰り返されていることばの三つ目は「至聖所」あるいは「内堂」と訳されていることばで、これは数えると七回です。これも偶然でしょうか。十二とか七という数字が聖書の中でも特別な数字であることはご存じだと思います。「(金を) かぶせる」と「至聖所」の二つについて十二とか七という数字が出て

来るのは単なる偶然ではないと思います。何らかの意図があつてこう書かれていると考えるべきでしょう。

3 キリストのからだが処罰される

1) 神殿はキリストのからだ

ソロモンが建てている神殿は、言うまでもありませんが目に見えるものです。石で造られていて頑丈そうには見えますが、いつかは崩れていきます。実際、ソロモンが建ててからおよそ三百六十年経ったとき、バビロンの手によって破壊されてしまいました。後にこのことを悲しんだイスラエルの人々は力を合わせて修復していきます。やがてエルサレムに来られたイエスは、修復されて立派になった神殿のそばに立ち、こう言われたのです。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」(ヨハネ 2 章 19 節) 福音書を書いたヨハネはこのことばを受けて、「イエスのご自分の体の神殿のことを言われたのである」(同 21 節) と、説明しています。イエスにとって、目に見える建物の神殿は単なる建造物ではない。神殿は、ご自分の体のことと強く結びついていると教えていただきました。そうしますと、ソロモンが建てている神殿もイエスのからだと結びつけながら考えることになります。

さきほど、この箇所には繰り返されていることばがあることを述べました。そのなかからきょうは「金でおおう」という所に目を留めていきます。いったいこのことばとイエスのからだどう結びつのか。

2) 金でおおう

中心は 20 節から 22 節です。「内堂の内側は、長さ二十キュピト、幅二十キュピト、高

さ二十キュピトで、純金をこれに着せた。さらに杉材の祭壇にも純金を着せた。ソロモンは神殿の内側を純金でおおい、内堂の前に金の鎖を渡し、これを金でおおった。神殿全体を、隅々まで金で張り、内堂にある祭壇もすっかり金でかぶせた。」いろいろなことばに訳されていますが、「着せる」「おおう」「張る」「かぶせる」、全部同じことばです。

神殿は石を積み上げて造られました。外から見ると、飾りというものほとんどありません。イスラエルの神が住む家にしてはあつけないほど質素です。しかし内側はまったく違います。すべてが金でおおわれています。莫大な費用がかかっただろうと想像されます。これくらいしなければ、世界を造られた神が住まうところにふさわしくない、ということでしょうか。もし神が住まうところとしてふさわしいように造るというのなら、内側がももちろんですが、外側も金箔を張り付けるべきではないでしょうか。日本には金閣寺や中尊寺金色堂というものがあります。

外側は質素な石の姿のままなのに、いづれ内側は徹底的に金箔でおおいます。「おおう」ということばを十二回繰り返して、それがいかに大切なのかを強調しています。

3) 罪ある肉をおおう

ロマ書 8 章 3 節にこう書かれています。「肉によって無力になったために、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。かみはご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。」

このみことばは、私たちがまもっているからだイエス・キリストとの関係をよく表しています。イエス・キリストは肉をまとう必

要のない方ですが、私たちのところへ肉をま
とって来てくださいました。なぜわざわざそ
のようなことなされるのか。

私たちは、肉のからだを持っています。そ
んな私たちは、律法を聞いてそれがすばらし
いものであると頭ではわかって、従うこと
ができません。どうして従えないのかと言え
ば、この肉のからだに罪が宿っているからで
す。これだけ多くの人がいるのだから、ひと
りくらいは罪がない人もいるのではないか、
そう思うかもしれません。そんな人はひとり
もいません。断言します。どうしてわかるか。
今まで死ななかった人がいましたか。少々長
生きする人はいたかもしれませんが、それで
も全員死にました。全員が罪人であることが
これで証明される。実に簡単です。

神はどうされるか。義である神は、罪はその
ままにしておけない。必ず処罰しなければ
なりません。当然のことですが罪のないと
ころは処罰できない。罪が宿っているところを
処罰します。肉が処罰されなければならない。

イエス・キリストが肉の姿で私たちのと
ころに来られたのは、どうしてか。肉が処罰さ
れなければならない。だから人となって来ら
れました。

イエスのからだにつながっていく神殿は
石で造られました。やがて十字架で崩されて
いく肉の姿です。十字架で処罰されていくキ
リストのからだは、私たちのからだと同じ見
えました。でも神殿のことから教えられます。
外側は同じに見えても、内側はまったく違う。
内側はすべて金でおおわれていました。石の
表面が見えないように、杉材と純金が全部を
おおっていました。

キリストの十字架は、やがて私たちの罪の
からだをおおっていきます。この罪のからだ

のことで私たちはいつも苦しんでいます。病
んでいます。痛みます。でもキリストの救い
は私たちのからだを完全に造り変えていく
と約束します。もう昔の罪のからだがまったく
見えなくなる。私たちを完全に覆い尽くす
のだと教えます。

私たちの罪をおおってくださる主の御名
をあがめます。